

平成30年度スジアオノリ養殖概況

加藤慎治

平成29、30年度の月毎の徳島県漁連共販数量の推移と対前年比を図1に、年度毎の共販数量と平均単価の推移を図2に示した。

10月上旬から種場が解禁となったが、西日本豪雨等夏季から秋季にかけて降水量が多かったことから種場が淡水化しており、母藻となる天然の藻体も観察されなかったため採苗作業が長期間にわたることとなった。10月以降はまとまった降雨もなく10月20日過ぎから種場の塩分が急速に回復したこともあり、種付けが進んだものの種網を長期間種場に設置していたため、網地への付着生物の着生が多く見られた。11月中旬から本養殖が開始され、天候および海況も安定していたことから順調に伸長したが、網地に付着したコケムシが製品に混入するなど品質低下が著しく、これらの選別作業が困難であることから収穫を見合わせる生産者が多く見られた。その後、種網の張り替えにより一定の生産は行われたものの、日照および降雨不足によりまとまった生産には至らず漁況が好転しないまま終漁となった。近年は漁場の高水温化や豪雨など漁場環境が安定しないことが多くになっており、気象や漁場環境をしっかりと把握した上で採苗時期の決定や網管理を行っていく必要がある。

平成30年度の徳島県漁連共販実績は凶作であった前年漁期をさらに下回り過去10年で最も少なかった。月別の実績では12月の数量が最も多く、年明け以降はほとんど生産されなかった（図1）。共販の最終結果は数量10.9トン、金額2.8億円、平均単価19,986円だった（図2）。

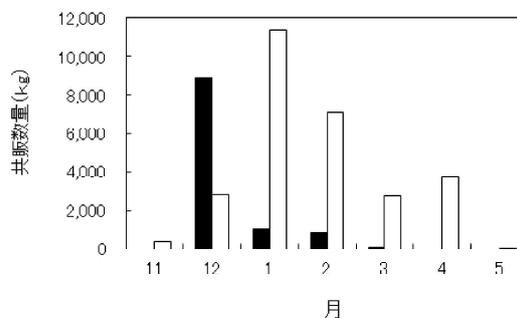


図1. 平成29, 30年度における共販数量の経月変化
■:平成30年度；□:平成29年度

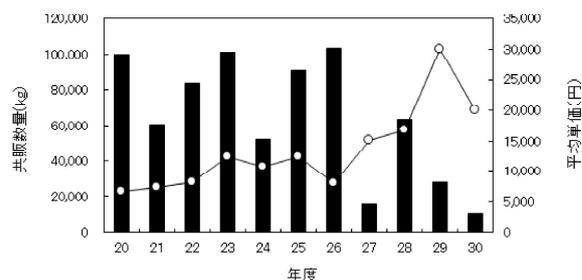


図2. 年度別共販数量と平均単価の推移
■:共販数量；○:共販単価